

ほし
クリスと星のかけら

だい かん へん
～第1巻メイク10編～



ち ほし あつ せ かい すく
「散らばった星のかけらを集めて世界を救え」

名前

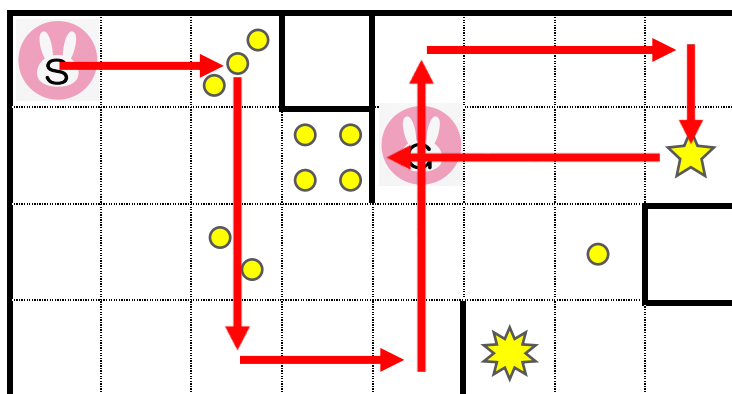
[illegible]

<プロローグ>

かつてこの大地は、夜空にまたたく星々の
加護に満ちていた。人々はその光を頼りに、
道を見つけ、心を照らして生きていた。
だがある日、空から星が消えた。
世界は、冷たい氷に包まれてしまった一。
加護を失った王国は凍てつき、命は静かに
息を潜めた。そのとき、星の声が告げた。

「選ばれし者よ。星のかけらを集め、
古の星座を蘇らせよ」選ばれたのは、
白銀の毛並みに星の耳飾りを揺らす者。
名はクリス。星に仕える“算術の徒”である。

<例>



★ : 10、→ : 7



🐰 S …スタート, 🐰 G …ゴール

星のかけら

1,2,3,4… ●, ●, ●, ●
5,10… ★, ★

上下左右に進めます。マス目は全て
氷の床で、壁(太線)に当たるまで止
まれません。止まったら方向転換が
できます。ゴールも同様に、ゴールの
後ろに壁がなければ通過してしま
います。合計で「Star」の数分、星のか
けらを集め、「Move」の移動数で
ゴールしましょう。

<エピソード1：しし座>

こおり ぎよくざ しし かこ
～氷の玉座と獅子の加護～

かつて、この王国には偉大なる王がいた。

だが、星の加護が失われた今、

その玉座もまた氷に閉ざされている。

クリスは、静かに眠る王の記憶に祈りを捧げ

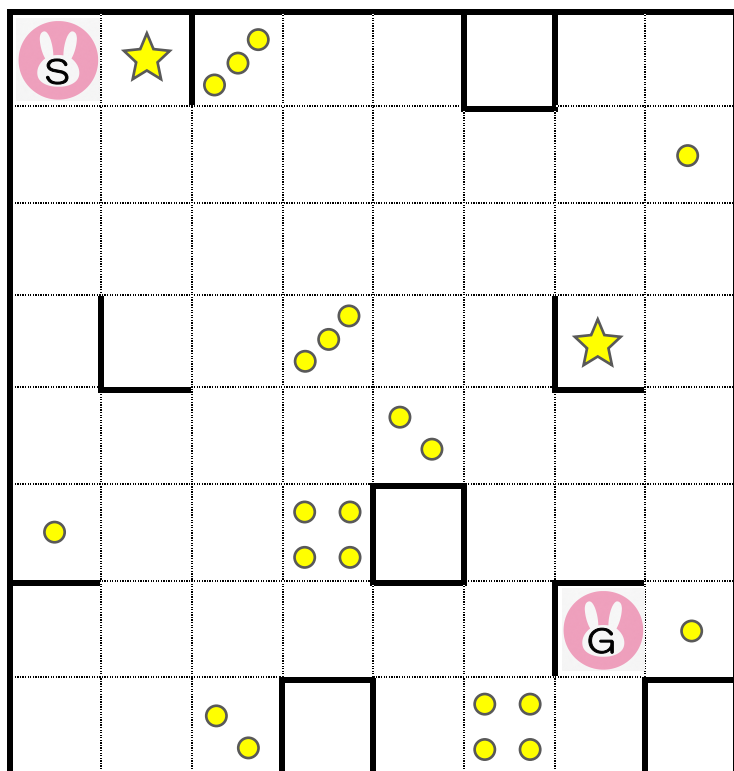
ながら、最初のかけらを求めて歩を進める。



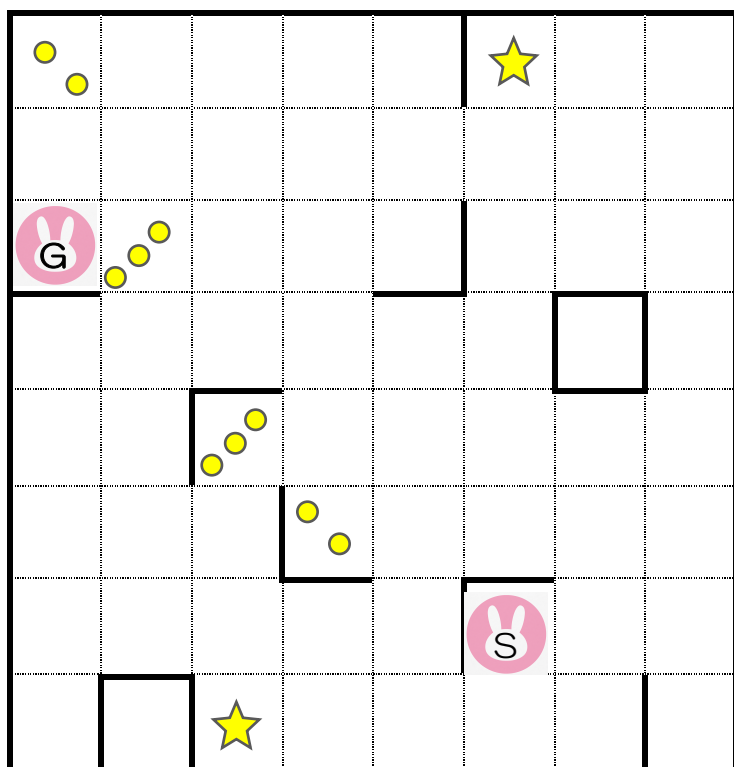
そら いげん しし ほし う ちから
空には威厳ある獅子の星が浮かび、その力

いま おうこく しんぶ やど
は今なお王国の深部に宿っている。かつての

ほこ とも ほし さが た
誇りと共に、星のかけらを探し出そう。



Star : 10、Move : 7



Star : 10、Move : 9

<エピソード2：ふたご座>

～ふたつの^{ちか}誓いと^{ふたご}双子の^{かいろう}回廊～

^{さゆう}左右に分かれた不思議な回廊に、クリスは

^{あし}足を踏み入れた。片側は^{かたがわ}温かな^{あたた}炎に^{ほのお}照らさ

れた^{おうごん}黄金の^{きし}騎士たち、もう一方は^{いっほう}静寂な

^{こおり}氷に包まれた^{あお}青い^{きし}騎士たち。天井には

^{ふたご}座が、^む向き合うように^あ浮かんでいる。



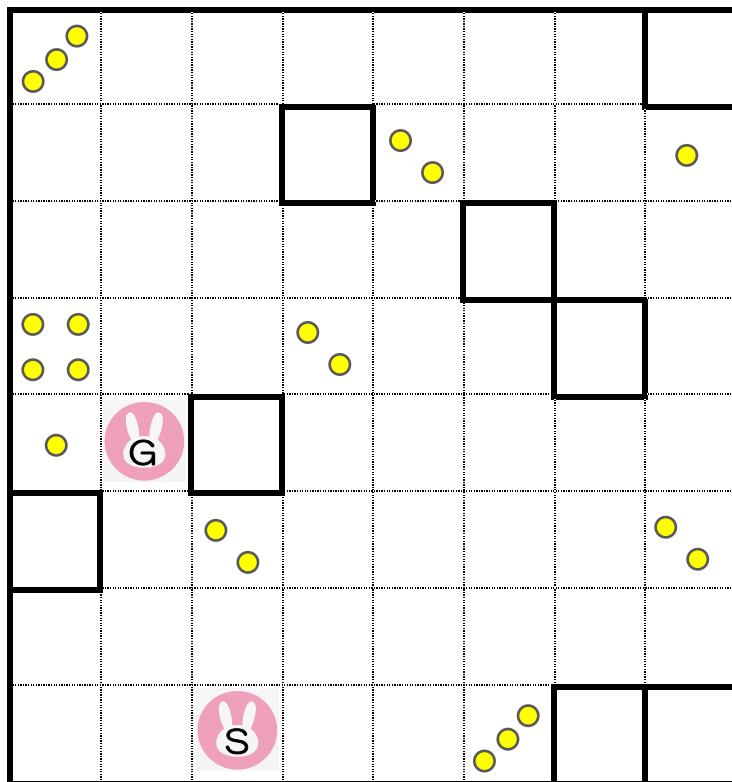
^{みち}この道を進むには、^{すす}二つの世界の^{ふた}狭間に^{せかい}ある

^{しんじつ}真実を見つけないといけない。

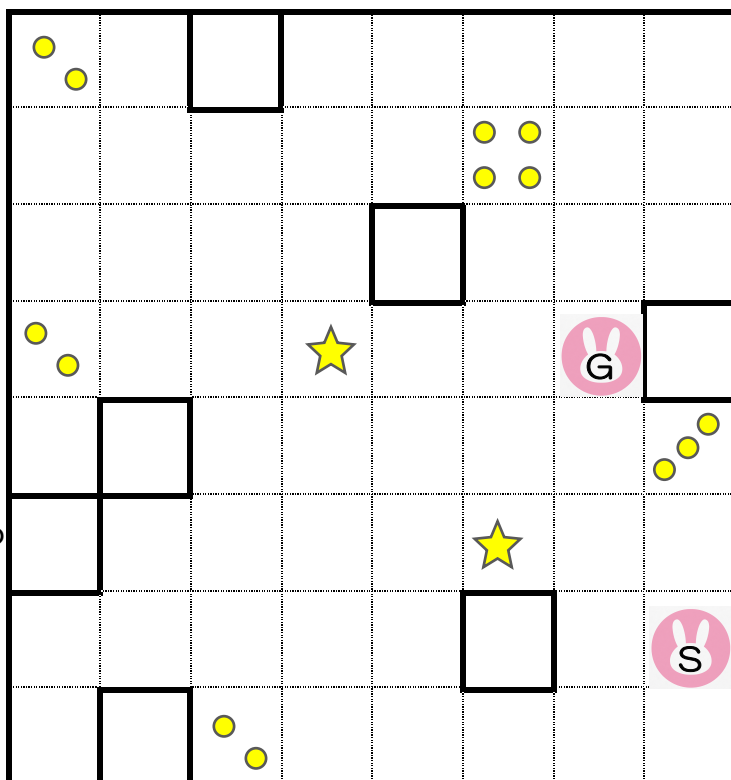
^{ひかり}光と影、^{かげ}炎と氷。

どちらも^{じしん}自身の^{うち}内にあるものとして、

^{ちょうわ}調和を見出せるだろうか。



Star : 10、Move : 5



Star : 10、Move : 8

<エピソード3：かに座>

～凍てつく潮路と蟹の道標～

夕日が海と氷の境界を黄金に染める頃、

クリスは凍てつく浜辺に降り立った。

波間には氷の足場が浮かび、空には蟹座の

光がゆっくりと瞬いていた。

自然の静けさに包まれながらも、どこかに

導かれているような確かな感覚が、

足元から伝わってくる。

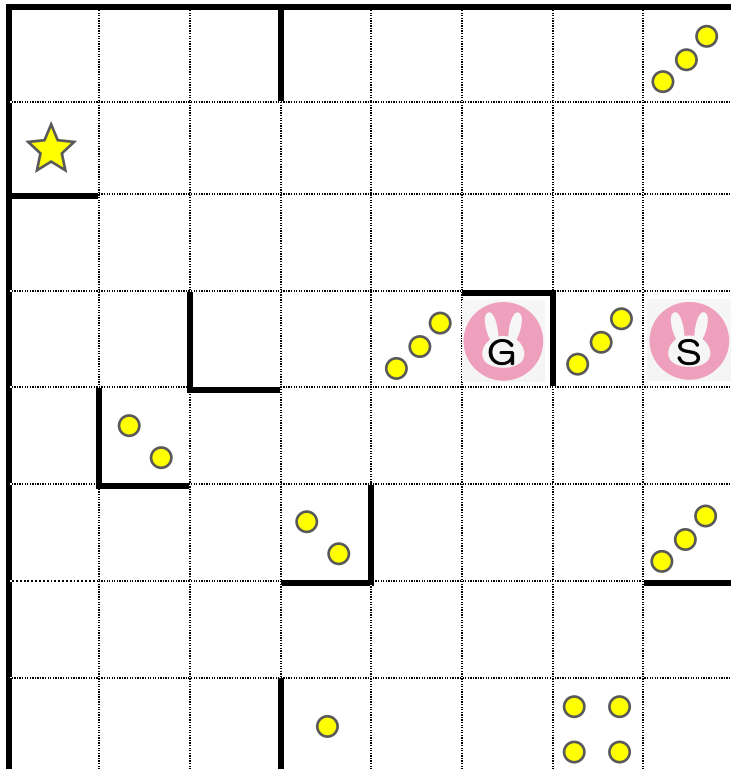


足元の道は脆く、進むたびに変化していく。

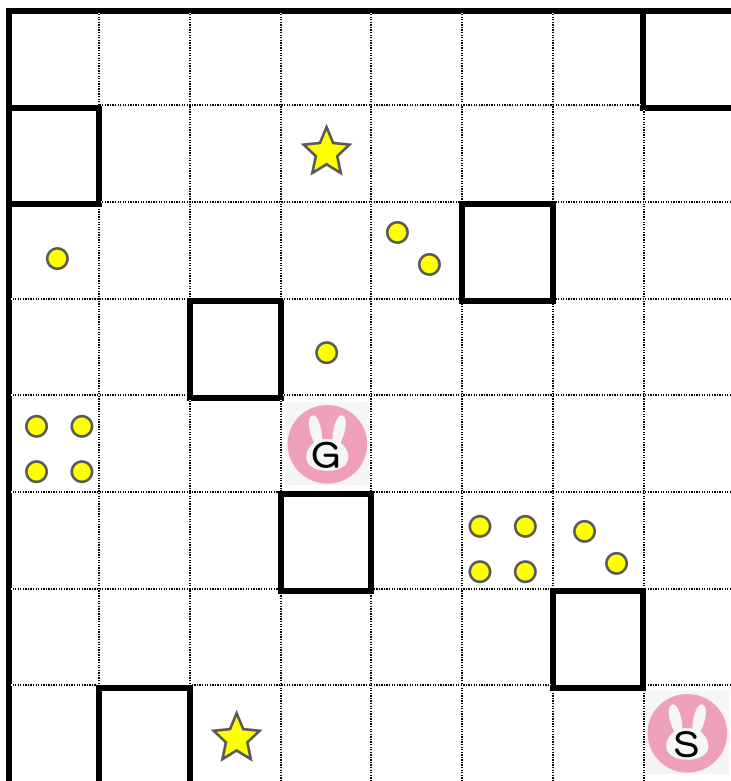
けれど、蟹のように確かな一歩を重ねて

いけば、きっと正しい場所へ辿り着ける。

迷いを捨てて、星の道を信じよう。



Star : 10、Move : 12



Star : 10、Move : 7

<エピソード4：さそり座>

すな こおり はざま ひそ はり
～砂と氷の狭間に潜む針～

かつては陽に焼かれた大地。いまや氷と

砂がせめぎ合う世界へと変わっていた。

や 灼けた空気の中、クリスは足元に浮かび

上がった魔法陣の存在に気づく。



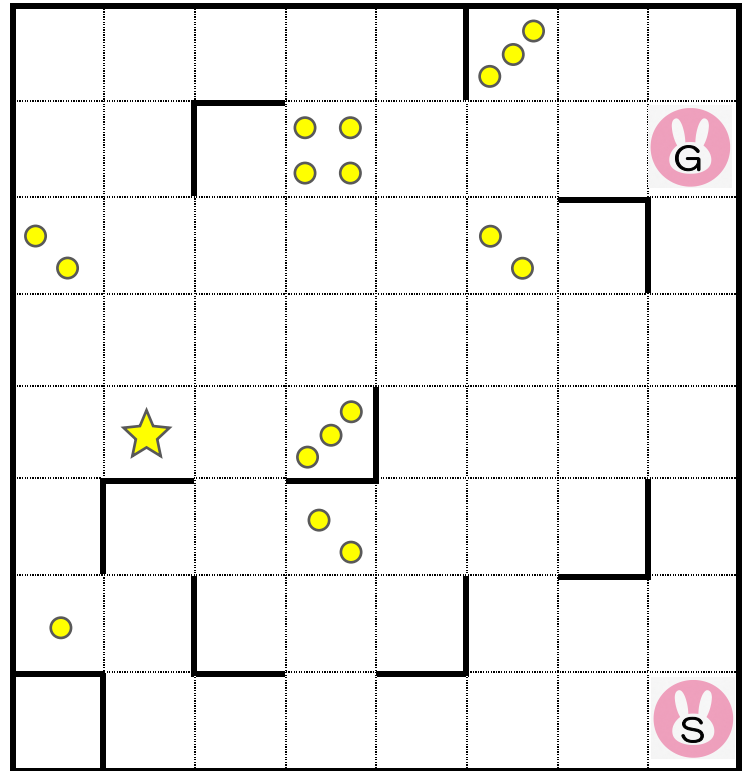
ほし 星々の気配を頼りに進むクリスの前に、

すど 鋭く かがや 輝く、さそり座のしるしがあらわ 現れる。

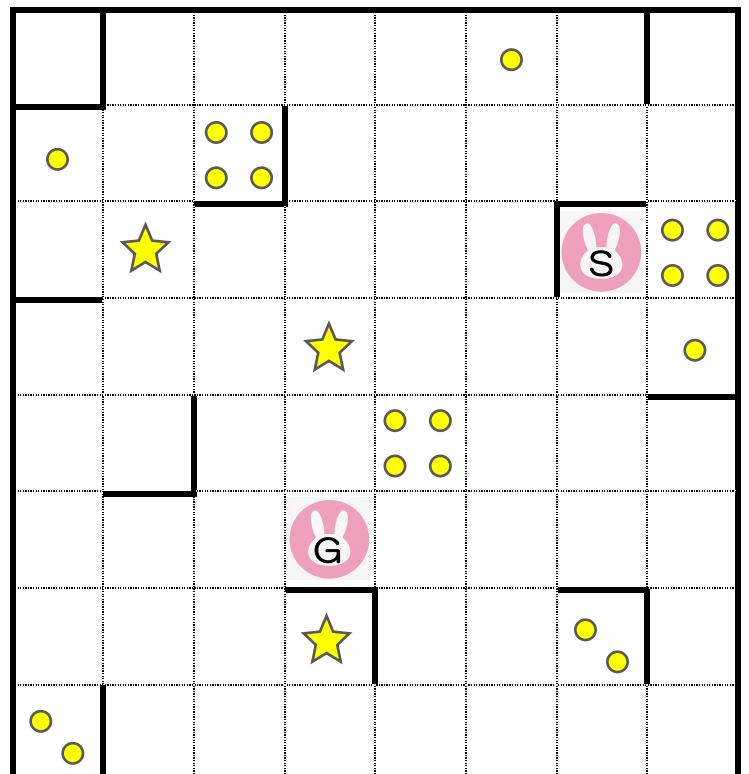
み 見えない毒と試練が潜むこの地では、

すす 進むほどに真価が問われる。

さそり はり ひる こお さばく き ひら
蠍の針に怯まず、凍れる砂漠を切り開け。



Star: 10、Move: 11



Star: 10、Move: 11

<エピソード5：みずがめ座>

～夕暮れの滝と水の記憶～

夕暮れの滝に響く水音。森の奥深く、氷と

水が織りなす幻想の空間が広がっていた。

差し込む最後の陽光が、

魔法陣を照らし出す。

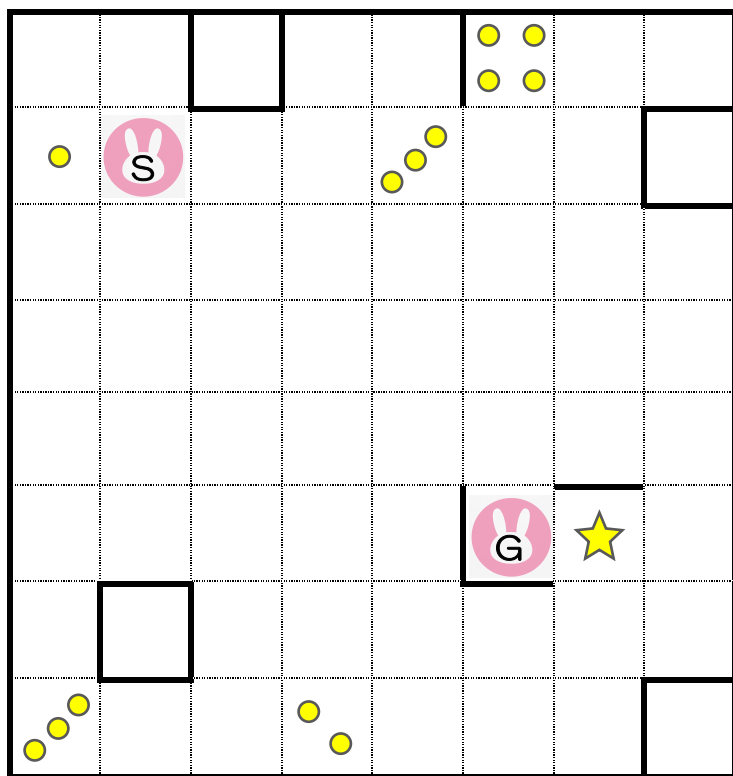


それは、かつて水を司った星の記憶—

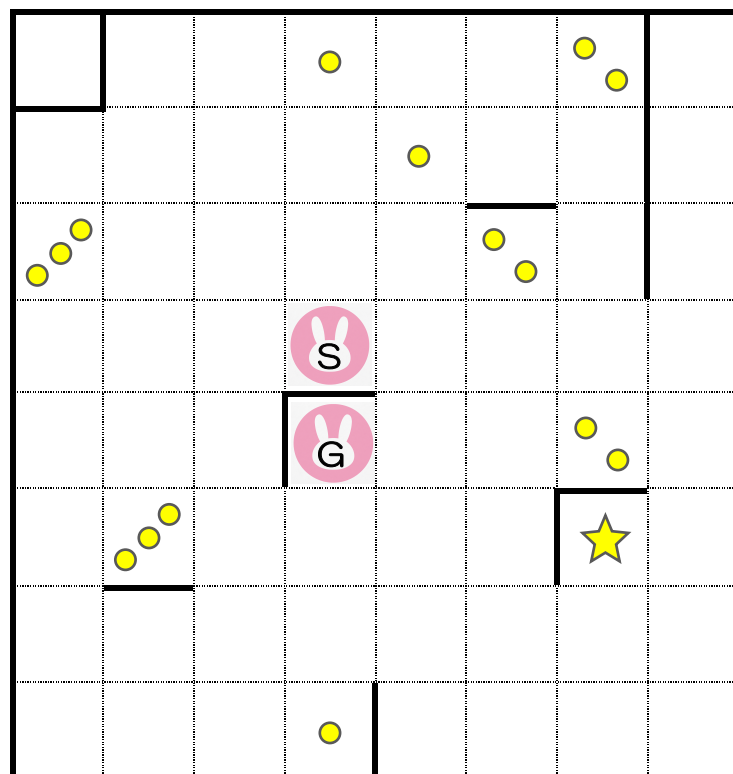
みずがめ座の力だった。氷に閉ざされな

がらも、なお流れを止めぬ水の加護。

流転の知恵をその手に。



Star : 10、Move : 8



Star : 10、Move : 9

だいっかん
＜第一巻 エピローグ＞

しず そうげん ほし ひかり ふ
静かな草原に、星の光が降りそそぐ。クリスのまわりには、たび なか で あ せいざ
旅の中で出会った星座たち。

ざ しし座、ふたご座、かに座、さそり座、みずがめ座——それぞれの すがた ひかり いのち
姿が、光の命

として浮かび上がっていた。ほし か ご たし もど
星の加護は確かに戻りつつある。

けれど、よ そら
夜空はまだ、すべてを取り戻したわけではなかった。

て ほし つえ み
クリスは手にした星の杖を見つめ、

ざ ひかり しめ さき あらた たびじ み す
やぎ座の光が示す先にある、新たな旅路を見据えるのだった。



